

国語科部会

司会者 渡辺 恭平（旭川市立大有小学校教諭）

助言者 望月 俊綱（上川教育局義務教育指導班主任指導主事）

渥美 伸彦（北海道教育大学旭川校准教授）

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

情報の扱い方に関する事項（共通と相違、順序）の指導の仕方について

- 言葉の相違に着目させて、その言葉の順序を入れ替えて、順序の意味を考えさせていたところがよかった。
- 「情報の扱い方に関する事項」が新設された中で、情報を扱った授業というのが新しく、面白いと感じた。授業の中で、情報の扱いを「共通点、相違点を見つけていく」というように具体化し、線を引かせたり、動作化をさせることによって、子供たちは登場人物の心情を想像できていたと感じた。



- 児童は「相違」の方に目を向けていたが、例えば、「～もまるまる太ってきたぜ。」などの「共通」に目を向けさせることにも取り組むとよいと感じた。表現は同じだが、込められている意味が違うということを考えさせても面白いのではないか。

単元の構成について

- 単元について、導入で『桃太郎』や「えいっ」という文章を扱っていたことで、子供たちも「繰り返してすごいね」ということが分かったと感じた。
- 本時の最後で、物語で押さえたことを基に「自分でお話を作るときにどう生かしていこうか。」ということを考えさせると、単元のゴールに向けて児童たちが学習を進められるのではないか。
- 「繰り返しのある物語を書く」ことは、実際には少し難しいように感じたが、書かせる際の手出ではどういったものを用意しているのか。
→授業者も「書くことは難しい」と捉えており、今回はかなり限定して書かせたいと考えている。単元の10時間目に書いているが、最初はこんな狐だったけど、こんな出来事があった、最後にはこうなったねっていう大まかな構造を押さえさせて、その構造を生かして最後のお話作りに入っていきたいと考えている。

本時の指導について

- 今日は、春と夏がどのくらいの長さなのかというところでとても盛り上がっていたが、そこは意図して盛り上げたのか。
→二年生は、まだ季節の捉えがあやふやなので、あれこれ言いながら春と夏の長さを実感していけたらよいと考えていた。一番理解させたかったことは、きつねが春から夏に変わるまでの長い間、ひよことあひるを育てていたということだったので、時間をとって話し合わせた。

Ⅱ 助言者からの講評 ※要点のみ

(1) 望月 俊綱 指導主事から

全国学力・学習状況調査の問題をぜひ見てほしい。一つの問題が単元になっている。裏を返すと、これからは国語は単元というレベルでもっと考えていく必要があるということである。今日の一時間を見るということも大事だが、今日の一時間に出ている子どもの姿が、単元のどの時間とつながっているかという視点をもっともって単元全体が見えてくる。例えば、単元の1・2時間目の姿が今日の授業の始まりにつながっている、授業の最後の部分がこの後の11時間目につながっていく、ということ意識しながら子供の姿を見るということである。

もう一つもってほしい視点は単元のゴール、もしくは単元の目的と、今日の一時間がどうつながっていくかということの子供が意識しているかどうかという視点である。今日の活動は、この一時間としての目的はあったが、その目的があの子たちの頭の中で、「繰り返しのあるお話」につながっていくという意識がどれだけあったかということはもちろん一度考える必要があるかもしれない。単元を通して子供たちに力を付けていくのだということを頭に入れておいてほしい。

今後期待することとしては、それぞれの立場で国語に対してどう関わっていくことを分けて考えてほしい。若い先生は、この時間のこの活動は、どういう力を付けることにつながるのかということを生懸命考えてほしい。ミドルの先生は、言語活動をもっと質の高いものにしてほしい。力を付けるために、最適な言語活動は何かということを考えてほしい。研究部長の立場の先生方には、今日の国語で学んだことが、他のどの教科とつながっているのかということを考えてほしい。カリキュラム・マネジメントにつながる視点をもってほしいと思う。



(2) 渥美 伸彦 准教授から

読む行為の発達段階を踏まえた指導の充実を行っていく必要がある。キーワードは、「参加者のスタンス」から「見物人的スタンス」である。「参加者のスタンス」というのは、動作化、音読である。「見物人的スタンス」というのは構造、プロット、語りを読むということである。

今日の低学年段階では、やはり参加者のスタンスをさらに充実させなければならない。動作化である。あそこをちゃんとやらないと、語りを読んでも意味が分からない。今日はそこが問題だったと思う。

動作化で、「うっとり」「気絶しそうになった」というところで、例えば「うっとりほんなこと。」「気絶しそうってどんなこと。」と分けてやらせてみてはどうだろうか。「どんな時に気絶しそうになったことある？」と、子供の体験を問うとよい。そうするとリアリティが増す。

「参加者のスタンス」で物語世界を味わった後、そこで終わる小学校の先生が多すぎる。活用できる知識を身に付けようというのが今回のカリキュラム、学習指導要領の考え方である。閉じた能力だけでは意味がないので、子供が自覚して活用できるようになる必要がある。そのときに、見物人的スタンスが必要になる。今日の「繰り返しの読む」ということだと思う。他にも、今日は、語り手が語ったことときつねが話したことが一緒になってしまっていた。例えば「ウサギも丸々太ってきたぜ」というのは、きつねが話したと読んでもいいし、オオカミが話したと読んでもいいし、ナレーターが語ったと読んでもよい。その読みの違いをみんなで問い合い、なぜこのように書かれているのかを読むと、活用できる知識として身につけていくだろう。

